

近代女性雑誌『常磐』掲載記事の基礎情報 —1897～1923年の目次集成と文体調査—

松 本 隆

【要旨】

明治後期から大正期にかけて横浜で毎月発行されていた『常磐』という女性雑誌の目次を集成し、一覧表の形で小稿の付録とした。一覧には、各記事の掲載頁、題名、執筆者名・講述者名に加え、各記事が基調とする文体（文末辞法）の情報も盛り込んだ。四半世紀にわたって発行された300号を越す『常磐』のうち今回の調査で約4分の3をカバーした。

【キーワード】

ジョージアナ・ボーカス (Georgiana Baucus)、エマ・ディキンソン (Emma Dickinson)、常磐社、文語文、口語文

◎付録：『常磐』文体情報つき目次集成、[Excel一覧表](#) (クリックしてダウンロード)

1 はじめに：女性が女性に向けて発信しつづけた女性誌『常磐』

1897 (明治30)年から1923 (大正12)年まで横浜の山手で毎月発行されていた『^{ときほ}常磐／*TOKIWA: A Woman's Magazine*』は「婦人雑誌にて旅行記や、育児法や、料理や、衛生や、有益なる物語や、珍らしき出来事」など様々な記事が盛り込まれていた (1908年版『常磐社発行書出版目録』より)。出版元の常磐社を起こした2人の米国人女性、ジョージアナ・ボーカス (Georgiana Baucus, 1862-1926) とエマ・ディキンソン (Emma Dickinson, 1844-1926) はメソジスト監督派教会の宣教師である (齋藤 2018)。上に引用した『常磐』宣伝文の後半は「其他婦人伝道者の心得となるべきことは更なり信者の家庭や、日曜学校に於て用ゐるやうなる面白き讚美歌なども収めて皆此雑誌にあり」と続く。

本誌の発行は、女性宣教師として日本では他に類をみない活動であると同時に、女性雑誌ジャーナリズムを論じる上で看過できない出来事とされる (齋藤 2018:137-139)。キリスト教史やジャーナリズム史を離れて、日本語史の観点からも本誌への興味は尽きない。本誌の創刊から終刊に至る四半世紀は現代的な書き言葉が確立していく時期と重なり、明治後期から大正期にわたる書き言葉の変遷が本誌記事に見て取れる。

とりわけ女性が女性に向けて発信しつづけた文章の実例集として貴重な資料といえる。『常磐』創刊初年度の各号奥付にある「編輯人ボーカス／發行人^{ママ}デキンソン」という態勢は関東大震災で同誌が休刊 (廃刊) する1923 (大正12)年まで維持された。2人とともに

雑誌づくりに関わった日本人スタッフもみな女性であった(齋藤 2009:183, 2018:143)。執筆陣にも女性が多く含まれ、まさに女性による女性のための雑誌といえることができる。

本誌の特徴的な編集方法(齋藤 2009:180, 2018:143)として以下のような日本語話者と英語話者との協同作業が注目される。(1)ボーカスとディキンソンが平易な英語で原稿を書く。(2)英文原稿を日本人が翻訳する。(3)ボーカスとディキンソンが翻訳を確認する。(4)日本人に翻訳原稿の批評と校閲を依頼する。(5)印刷。

創刊初年度には日本人スタッフとして翻訳者7名と助手2名がいた(齋藤 2018:143)。彼女らとの協同編集作業は、ボーカスとディキンソンにとって「英語の出版物を出すよりも三倍の労力を要する」ものであったが「読みやすく魅力的な雑誌にするために、自分たち自身が日本語で書くべきではない」との判断を下した(齋藤 2009:180)。

ボーカスは1890年に来日し、メソジスト監督派教会の女学校(函館、弘前、米沢)で5年にわたり教鞭をとった。いったん帰米したのち、日本の女性と子供に向けた文書による伝道活動のために、ディキンソンとともに再来日した。宣教師という仕事柄、また5年にわたる女学生らとの日常的な交流経験の長さから考えて、本誌創刊当時すでにボーカスの日本語運用力はかなりのレベルに達していたと推測できる。しかし、いかに外国語に習熟しても非母語である以上どうしても制約が付きまとう。『常磐』を「読みやすく魅力的な雑誌」にするために母語話者と協同する方途を選択した判断は賢明で結果的に成功した。

2 『常磐』を取り巻く言語的な時代背景

前述のごとく『常磐』が発行された明治後期から大正期にかけての四半世紀は、現代的な書き言葉の確立期にあたる。旧来の文語文が衰退する一方で、口語文が隆盛するという、文体の交替が本誌でも観察される。1890年代末と1920年代初めの記事を見比べると、書き方の違いが如実にわかり、この四半世紀が文体史上の画期にあたることが実感できる。

ごく大まかにいうと明治後期は、複数の文体を目的に応じて使い分ける、諸文体併用の時代であった。書き手には文体選択の自由があり、文語文にするか口語文にするか、口語文の場合どのような文末表現を用いるか、といった裁量の幅が広がった。それに対して口語化が進んだ大正期、本誌の記事を文語で書くという選択肢はごく限られてくる。標準的な口語文体が確立し、悪くいえば書き手の文体的な個性が発揮できなくなってしまった。

前の第1節で『常磐』の記事が英文和訳の過程を経て作成されていることに触れた。翻訳に際しては、記事の内容ばかりでなく、時流(読者層の文体意識)の変化も考慮に入れて、日本語の文章を組み立てねばならない。これは非母語話者にとって極めて難しい判断を伴う。そこで大きな力となったのが日本人スタッフの言語感覚である。平易な英文で書かれた草稿を、いかに「読みやすく魅力的な」日本語に仕上げるかが母語話者の腕の見せどころとなる。「読みやすさ」は受け手の読み書き習熟度によって異なり、また「魅力的

な」文章のありかたは時代によって移り変わる。受け手の感性を推し量りながら、送り手は文章表現を調整する必要があった。これは母語であっても容易でない。

女性が女性に向けて発信する『常磐』の場合、一般的な総合雑誌などと異なる文体を選ぶ可能性が考えられる。『常磐』は市販された定期刊行物でありながら毎号の発行数は千部にも満たなかった(齊藤 2009:181-182, 2018:139)。同時期、商業的に成功を収めていた総合月刊誌『太陽』は、老若男女を問わず広く一般大衆に向けて毎号 10 万部を越す発行を維持していた(鈴木 2001:9)。いっぽう販路の狭い『常磐』には、読者一人ひとりを大切にできる利点があった。『常磐』は、編集方針として読者からの反応(投書など)を重視し(齊藤 2009:179-180)、読者との距離を縮めようとしていた。この雑誌が送り手と受け手をつなぐ絆として機能し、本誌によって結びついた女性たちの関係性は、やはり誌面を通じて維持・拡張・強化されていくことになるのである。

3 調査のねらい、範囲、方法

『常磐』に関わった女性たちが、例えば『太陽』などの場合と異なる、特定の文体意識・言語規範を共有していたと仮定してみよう。話し言葉では、地域や社会階層といった属性ごとに、共同体独自の言語的な特徴を示す現象が日常的に見られる。『常磐』の書き言葉においても独自の傾向が認められるのではないだろうか。その証左を得るため、現存する『常磐』を渉猟し、なるべく多くの記事に触れて、何がどう書かれているかを調査した。

もともと発行部数が多くなかった『常磐』は現存数も少なく、創刊から終刊までの全号が一堂に揃う蔵書収集は見あたらない。本誌は 1898(明治 31)年 1 月の第 1 巻 1 号から 1922(大正 11)年 12 月の第 25 巻 12 号までの 25 年間で通巻 300 号を達成したことになる。本誌に通巻号数の記載はないが、今回の調査では途中休刊は認められなかった。関東大震災(1923 年 9 月 1 日)が発生し、休刊を余儀なくされた大正 12 年の第 26 巻は、7 号の現存が確認できる。また第 1 巻 1 号の創刊に先だって、その告知が 1897(明治 30)年 12 月発行の特別号でなされた。つまり全部で 308 号(かそれ以上)が発行されたことになる。

これら 308 号のうち今回の調査で閲覧した資料は複製も含め 229 号、全体の約 4 分の 3 に迫る(vol.1-4,5(11),6,7(1-4,6-12),8,9(1-9,11-12),10(1,3-12),11(1-6,8-12),12(1-10,12),13(1-2,4,6-11),14(1-8,10,12),15(1-8,10,12),16(8),18-21,22(3,5,12),23(1-4),24(11),25,26(7)+創刊準備特別号)。調査には、横浜開港資料館、横浜中央図書館、神奈川県立図書館、群馬県立図書館、東京神学大学図書館、愛媛大学図書館の蔵本を利用した。

本誌は例年 12 月号の巻末に、その年の 1 月からの年間総目次を掲載する。入手できた総目次を集成し小稿の付録とした。12 月号末の年間総目次とは別に、月ごとの掲載内容も各号冒頭の目次に示されている。総目次が入手できなかった資料(vol.1,5,16,23,24,26,特別号)にかぎり各号の目次を付録に引き写した。各号目次が掲載順に記事を配列するのに対し、

総目次は分野ごとに記事を整理しており、内容と文体との関係を把握しやすい。総目次は例えば、紀行、世事、教育、家庭、育児、衛生、料理、裁縫、伝記、物語、詩歌、随筆、宗教、伝道、講演（筆録）などの分野別あるいは連載欄・掲載欄ごとに年間の記事を分類配置している。ただし、多種多様な文章の類型化はどうしても恣意的になりやすく、記事のまとめ方は年ごとにバラツキが見られる。年を隔てた記事の比較には注意を要する。

なお第17巻の本体は未見で、入手できた総目次の項目だけを小稿の付録に引き写した。

4 付録の記載内容とその見方

付録には各記事の、(1)掲載頁、(2)題名、(3)執筆者、(4)文体に関する情報を、表計算ソフト「エクセル」に入力して一覧化した。

(1) 一覧表のA列はチェック用の空欄とし、B列に各記事の所在を示す8桁の数字を記した。例えば「02-084-090」や「21-322-326」のように2桁+3桁+3桁の数字で示した。最初の例は第2巻の84頁から90頁までの記事、次の例は第22巻322～326頁の記事を意味する。年間総目次は各記事の開始頁だけを通巻頁で記すが、付録では開始頁に加えて終了頁も付し、記事の分量がどれくらいか大体わかるようにした。

創刊初年の第1巻は、毎号の(月別)頁だけで、通巻頁が振られていない(第2巻から両方を併記)。また第1巻の総目次は、分野別に構成しなおしておらず、各号の目次を1月から12月までそのまま再録している(第2巻から分野別に整理再編)。第1巻については小稿付録でも同じく時系列の配置を踏襲した。例えば第1巻1号の7頁から10頁にわたる記事なら「01a-007-010」のように記した。第1巻を示す冒頭の「01」に続く「a」が1号を意味する。2号の13頁の記事なら「01b-013-013」のようになる。「b」が2号を意味し、次の「013-013」はこの記事が13頁内だけで完結することを示す。3号の「c」以降、順次同じ要領で11号の「k」、12号の「l」まで号数をアルファベットで示した。

第1巻1号に先立つ前年12月に発行された特別号の各記事の冒頭数字は「00-」とした。また頁数のない巻頭の扉(その多くはグラビア写真や絵画など)に時おり詩歌などが掲載される。このようなとき最初にシャープ「#」を冠して末尾を「-00」とし、例えば「#14-01-00」のように示した。ちなみに、これは第14巻1号(明治44年1月号)巻頭の「新年の歌」である。なお(未見の号の)未調査記事には終了頁の箇所に「未」と記した。

(2) 一覧表のC列に各記事の題名を記入した。題名は目次からの転記を基本としたが、目次と記事本体に冠された題名が異なる場合などは、本文の内容を想像しやすい題名を適宜採用した。総目次・各号目次とも日英語の両版があり、邦文題名より英文題名のほうが本文の内容を具体的に言い表している場合がある。そのような事例においては、邦文題名に続いて英文題名も付記した。なお市販された合本は各号の表紙とその裏面の目次を欠く。

『常磐』はほぼ全ての漢字に仮名を振っているが、付録では現行の読み方と異なる振り

仮名だけを残し、容易に読みが想像できる振り仮名は省いた。題名の振り仮名が目次と本体で異なる場合、なるべく本文中に用いられている振り仮名を選ぶようにした。

例えば上の(1)で例示した「21-322-326」の「黄金よりも貴きもの」という題名の「黄金」に、総目次は「こがね」と仮名を振るが、第9号の目次には「きん」とあり、記事本体に冠された題名も「きん」と振っている。本文中で「きん」の用字は「黄金」でなく「金」一文字で表記している。いずれにしても本文に「こがね」という語形がないことから、付録では「きん」を採り「黄金(きん)よりも貴きもの」と記した。振り仮名は半角サイズの丸括弧内に挿入した。もともと『常磐』が用いていた丸括弧は全角サイズで転記した。

(3) 本誌には無署名の記事も多いが、総目次・各号目次・記事本体のどれかに執筆者や講述者の名がある記事も少なくない。その場合、C列の題名の次に三点リーダー「…」を介して名前を付加した。同一記事について、記事本体には筆名・雅号等が、各号目次には実名・姓名が記されていることもある。その場合は両方を付録に含めた。総ルビが基本の本誌であるが、執筆者や講述者の名に振り仮名がないこともある。漢字の読み方が特定しにくい名前について、英文目次にローマ字名が記されていたら、漢字名とあわせてローマ字名も採録した。外国人カタカナ名にも、なるべく元の綴りを付記するよう努めた。

(4) 一覧表のD列～L列の升目9つを使って、各記事が基調とする文体を示した。先の第2節で既述のごとく『常磐』の刊行時期は、書き言葉の潮流が文語文から口語文へと変わる画期にあたり、本誌も時代が下るにしたがって口語化が進んでいく。その推移過程を具体的に把握するために下記9種の文体類型を設定して各記事の分類を試みた。おもに地の文の文末表現に注目し、文語文を3種、口語文を6種に分けた。

【付録の一覧表で用いた文体類型9種の略号とその意味】

列	文体	「略号」…	解説
D	文語	「ナリ」…	文末に「ナリ」を主用する文語調の文章全般
E	〃	「ベシ」…	文語文のうち文末に「ベシ」を多用する指示型の文章
F	〃	「候文」…	文語調の書簡体など、文末の大半を「候」で括る文章
G	口語1	「座リ」…	文末に「 <u>デ御座リ</u> マス」を主用する口語体の文章
H	〃	「座イ」…	〃 「 <u>デ御座イ</u> マス」 〃 〃
I	〃	「アリ」…	〃 「 <u>デアリ</u> マス」 〃 〃
J	〃	「デス」…	〃 「デス」 〃 〃
K	口語2	「敬体」…	上記4種の文末辞がみられない「マス」体の文章
L	〃	「常体」…	文末の大半を「デアル」などの非丁寧体で終える文章

文語文のうち、Dは当時のもっとも一般的な文語文である。Eは「ベシ／ベカラズ」など命令／禁止の表現を多用し、読者に行動を指図する文章で、料理の調理法が代表例であ

る。Fは書簡や、その体裁を装った文章、また編集者から読者への告知などに用いられる。

口語文の丁寧な文末辞法は一般的に、GやHの「御座 {リ/イ} マス」から、Iの「デアリマス」を経て、Jの「デス」へと推移した。これら4種の文末辞法を「口語1」として括った。「口語2」はその他の口語体である。Kには、上述の「デアリマス」や「デス」など断定の文末辞が見出せないものの丁寧体で書かれた、いわゆる「マス」体の口語文を分類した。最後のLは「deal」文末に代表される言文一致体である。ここには「deal」が見出せない常体の口語文、例えば「動詞+シタ」や「形容詞+ダッタ」なども含めた。

付録は、表計算ソフト「エクセル」で作成し、文体類型9種の集計を容易にした。記載法は例えば、ある1つの記事が断定の文末辞に「デアリマス」を専用していれば、一覧表のI列「デアリマス」の升目に「1」と記入した。「デアリマス」と「デス」をほぼ半々に併用する場合、IとJの両升目に「0.5」ずつ分配した。「デアリマス」より「デス」が優勢な記事であれば、前者を「0.3」、後者を「0.7」などと按配した。「デアリマス」が稀にみられる程度でほぼ「デス」を主用するような事例では「0.1」対「0.9」とするなど、合計が「1」になるよう適宜配分した。これらの数値は、全記事の全文末を厳密に算定した結果でなく、読者として記事に接した際に得る印象を反映させた概数である。

5 おわりに：今後の課題

付録として作成した基礎資料の分析、特に文体類型9種の集計値の解釈をこれから進めていく。『常磐』の文体的特徴（の有無）を明らかにするには、同時期の総合雑誌『太陽』や女性雑誌『女学雑誌』『婦人之友』などを対照資料として利用するのが有効である。

付録資料の分析と並行して、資料そのものの更なる拡充にも力を注ぐ必要がある。今回『常磐』全巻の約4分の3を調査したが、所在のわかっている未見資料がまだ残されている。それらを渉猟し、実見済みの資料についても必要に応じて再読・精読していきたい。

参考文献

- 齋藤元子 (2009) 『女性宣教師の日本探訪記：明治期における米国メソジスト教会の海外伝道』 新教出版社
- 齋藤元子 (2018) 「ジョージアナ・ボーカス：常磐社を起こしたジャーナリスト宣教師」「エマ・ディキンソン：文書による伝道活動」 横浜プロテスタント史研究会編『横浜の女性宣教師たち：開港から戦後復興の足跡』 有隣堂、137～141頁、142～146頁
- 鈴木貞美 (2001) 「明治期『太陽』の沿革、および位置」 鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』 思文閣出版、3～39頁